

◆発信を受け止めて～ゲストスピーカー等からのコメント

ゲストスピーカー：

ふれあいの家ーおばちゃんち事務局長 幾島さんより

●子育て支援施策とは？

私は、半分は行政に関わる人間ですが、今、少子化対策、次世代育成ということで、いわゆる「子育て支援」には、ある面比較的予算が回ってきています。行政も「少子化」は何とかしなくてはいけないと思っており、追い風ではあるのです。しかし、行政ができることには限界もあるのです。

これは、限界なのか行政の勘違いなのか、両方あると思いますが、よく行政は子育て支援をしようと、100人の親子がいたら100本の手を出そうというような発想に陥りがちなのです。しかしそんなことをしていたら、いくらお金があっても足りないわけです。

児童館に来る親子の皆さんひとりひとり全員に、私が同じように対応するよりも、お母さん同士子ども同士が仲良くなり、助け合えること、グループができること、そういう支え合う関係を作ることに務めるということが、私の仕事なのだ気が付いたのが数年前です。つまり、子育て「支援」は、ひとりひとりを「支援」するのではなく、支援し合える、お互いに支え合う関係を作っていくことが、子育て支援施策なのだと思います。

●グループのつながりが、優しい町を創る

その中で、こうして区民同士、活動している者同士、お母さん同士が、横につながり合うことが大事です。それは、ただおしゃべりしたり仲良くなるということを超えて、ひとつの目的とかミッション、同じ趣味とか、何かかたちになるものを作るといような、ひとつの目的で仲間になるグループを作る、そういう活動がたくさんできることは、いろいろな意味でうねりになっていき、やさしい町を作っていくうえで、とても重要なポイントになると思います。

今、税金の使い方には不満もあります。ですが、お金はなくても、私たちにできることもたくさんあると思います。もうちょっとお金を回してもらってもいいなとも思いますが・・・。できることをできる人が、楽しんで、できるだけやっていくことで、必ずかたちになっていいものができると思っています。これからもお隣同士、品川と仲良く楽しくやっていきたいと思っています。これからも皆さんどうぞよろしくお願いします。

参加して下さった子育て支援機関：

みなとキッズサポートセンター（港区子ども家庭支援センター）

地域交流担当スタッフ 村中さんより

●みなとキッズサポートセンターがオープンしました

港区立子ども家庭支援センターの紹介をさせていただきます。

浜松町の駅近くに昨年の10月31日にオープンしました。愛称は、みなとキッズサポートセンターといいます。

みなとキッズサポートセンターには地域活動室があります。子育て支援にかかわる方が10人集まれば登録をして使用することができます。また、100平方メートルの親子のふれあい広場では、0歳から3歳のお子さんと保護者が遊べるように遊具や絵本を用意してあります。ぜひ、皆さんでご活用ください。平日は9時から5時までです。（4月以降週末もご利用できます。火曜日と木曜日は夕方7時まで利用できます）

センターにお出かけいただいて、どうぞ気軽に職員に声をかけてください。様々なご相談にも応じております。

●港区の子育て支援の輪が広がっていく

今日の場に参加させていただいて、明治学院大学の社会学部附属研究所が、港区の子育て支援者のとても良いまとめ役になってくださったことに感動しております。今日この場を共有できたことが、これからの子育て支援の大きな一歩になることと思います。

皆さんの一つ一つのお声を、私たちキッズサポートセンターに宝物として持ち帰らせていただきます。



社会学部附属研究所：所長 水谷史男

(閉会の挨拶を兼ねて)

●パパの姿が全く見えない

今日はどうもありがとうございました。

お話を聞いていて、全員女性の発言で、大体ここにあまり男はいません。

今日のタイトルが「都心で子育てまっ最中！ママ・パパからの発信」ということになっていますので、本当はパパが来てくれるといいなと思いました。

私自身は、2人子どもがいます。もう下が高校生になってしまったので、子育てはそろそろ終わりという感じですが、かつて10年ぐらい前は子育てをしていました。

男性・女性のジェンダー言説空間というのが、はっきり違う話題としては、この子育てが典型的です。今日のお話もそうですが、「母親と子ども」あるいは「お母さんからの発言」ということで、ほとんど終わってしまう。やむを得ないのですが。では、パパはどうなっているのか、パパの姿は全く見えないので、もちろんパパがどこかにはいるのかもしれませんが、現実問題なかなか子育てができない。

私は、発言する資格が少しあると思うのは、2人子どもがいますが、共稼ぎをしていたので、2歳、3歳ぐらいまでは、おむつは全部私が換えて、お風呂に入れて、夜、向こうは会社があるので、夜起きたり泣いたりするわけですが、私がお湯を沸かして、抱っこして、面倒を見て、2年ぐらいは完璧にやりました。後半1年は外国にいたので、ほとんど子育てをやっていたようなものです。

そういうことからすると、男性の議論と女性の議論というのは、全く違うところから出ていて、それは相変わらず何も変わっていない気がします。こういう機会に、皆さんいろいろ現実には苦労されている方々が交流することを、これからはどんどんやっていきたいと思えます。できればパパに出てきて考えてもらいたい。

●パパはもう少し真剣にやらなければいけない

ところが、現実問題なかなか難しいというのは、確かにそうなのです。私など男ですから、この前も少子化問題対策の会議があって、男性がほとんどの場所で話を聞いていたら、そういう所に出てくる話は大体、「日本の女にはもっと子どもを産ませないといけない」とか、「じゃあ、保育園とかいろいろ造ってやればいいのか」みたいなことしか言っていない。

そういうことを言っているおじさんは、自分で子育てをした人はほとんどいなくて、もちろん子どもはいるのですが、全部妻に任せて仕事だけやってきたような人がほとんどです。そういう場で話されている話題と、実際に女性が子どもをかかえて子育てをしている所での話題が、あまりに食い違っていて、そ

れをある意味結び合わせる場所が全くない。表立ってくるときは、まさに行政はそういうことをやらなければいけないし、「どうやって子育て支援をするか」みたいなことは出てくるわけです。

現実問題を話し合って、だれも自分が子どもであった経験はありますが、自分の子どもが生まれるまで、親であった経験はないので、親というのはどうやっていこうかと手探りでやっていく、その中でだんだんと考えていかざるを得ないのです。男性はそこで手を抜いてしまうと、それで今までは通ってきてしまっているところがあるが、これからはそうもいかないだろうという気がしています。

余計なことですが、皆さんのお話を聞いていて、パパとしては何かもう少し真剣にやらなければいけないと思いました。

今日は、われわれがお子さんをお預かりして、会場の一角は保育所状態になっていますが、またこういう機会を企画して、皆さんにも来ていただきたいと思いますので、よろしく願いいたします。今日はどうもありがとうございます。